

## ヤコブの手紙3章「舌を制する」

### 1A 制御しがたい舌 1-8

#### 1B ことばによる過ち 1-4

1C 教師に対するさばき 1-2

2C 全体を制御する小さい物 3-4

#### 2B 舌にある不義 5-8

1C ゲヘナにまで至る火 5-6

2C 制しがたい舌 7-8

### 2A 心を欺く人 9-18

#### 1B 兄弟を呪う者 9-12

1C 賛美し、呪う口 9-10

2C 心から湧き出るもの 11-12

#### 2B 知恵ある者 13-18

1C 柔和な行い 13

2C 地上の知恵 14-16

3C 上からの知恵 17-18

## 本文

ヤコブの手紙3章を開いてください。ヤコブは、私たちを霊的成熟へと向かわせる、知恵のことばを与えてくれています。彼は、みことばをただ聞くだけでなく、それを行うようになりなさいと勧めているし、信仰とは、信じていると言っているだけの役に立たないものでなく、行いの伴うものであることを語っていました。今の言葉でいうならば、本物志向です。言っていることと、やっていることが違う生活ではなく、本当に信じている通りに生きなさいということです。

そして、前回は、私たちは主イエス・キリストを信じているといいながら、この方の前でだれもが平等なのに、いつの間にかえこひいきして、悪い心で裁いている問題を、ヤコブは取り上げていました。それから、困っている人、事欠いている人に、ただ言葉だけを話して、助けの手を出さない問題も取り上げています。そこには、憐れみです。

そして3章と4章の前半は、「主を信じていると言いながら、兄弟と言い争いをしたり、悪口をいったりしている問題」を取り上げています。すでに1章26節で、導入として語っていました。「自分は宗教心にあついても、自分の舌を制御せず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなししいものです。」舌を制御しないこと、そして心を欺いていることの問題です。

## 1A 制御しがたい舌 1-8

### 1B ことばによる過ち 1-4

### 1C 教師に対するさばき 1-2

<sup>1</sup> 私の兄弟たち、多くの人が教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。

ヤコブは、新たな話題を切り出す時に「私の兄弟たち」と呼びかけています。同じ兄弟として、愛をもって戒めています。これから、自分の舌を制することを教えますが、その筆頭が教師です。神のみことばを教える人ほど、語る人はおらず、その責任は重大です。「より厳しいさばきを受けます」と言っています。より厳しいと言っているのは、すべての人がことばについて裁きを受けるけれども、教師はことさらにその責任は重いということです。

旧約の時代から、神のみことばを教える者に対する裁きは、はっきりしていました。律法においては、他の神々に仕えるようにそそのかす預言者たちは、石で打ちなさいと命じられています(申命 13:10)。人々は、パンだけでなく、神の口から出ることばで生きるのですから、その神のことばを教える者が、人々を真理から迷い出させることをするならば、大きなつまずきをもたらします。

イエス様は、律法学者やパリサイ人たちに厳しかったです。その語っている言葉によって、裁かれることをはっきりと語られました。「マタ 12:36 わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益なことばについて、さばきの日に申し開きをしなければなりません。」そして、教えていることは正しくても、彼らのしていることは真似するなとも言われました。「マタ 23:2-3 律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」そして、「わざわざいだと 8 回も宣言して、「あなたがたは天の御国に入れなさい、人々が入るのを妨げている。ゲヘナの子にしているのだ。」と言われています。かなり深刻です。ですから、多くが教師になってはいけません。あなたがたが知っているように、より厳しいさばきを受けるからだ、と言っています。

けれども、逆を言うと、主の前に申し開きがきちんとできるように、教えればよいということになります。人々から何と言われようとも、真理をまっすぐに語る勇気が与えられます。主の裁きの御座の前に出ても、良心において清められていることに集中すればよいのです。人の評価ではなく、神の評価を気にすればよいのです。「I テサ 2:3-3 私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして、語っているのです。」

<sup>2</sup> 私たちはみな、多くの点で過ちを犯すからです。もし、ことばで過ちを犯さない人がいたら、その人はからだ全体も制御できる完全な人です。

人はみな、過ちを多くの点で犯します。その時に、教師としてはより厳しい取り扱いを受けます。指導的立場の人たちはより厳しいのです。ダビデが罪を犯した時に、ダビデ自身は罪が赦されましたが、彼の家に剣が離れないとして、ナタンが宣言しました。兄弟姉妹で強姦の罪、殺人の罪、最後はダビデの王座を転覆する者が現れるなど、多くのことが起こりました。パウロがテモテに、按手する時に性急に置いてはいけなさいと言いました。「I テモ 5:22 だれにも性急に按手をしてはいけません。また、ほかの人の罪に加担してはいけません。自分を清く保ちなさい。」

特にことばについては、全体に影響を与えるのだと言っています。とても小さい器官ですが、からだ全体を制御するように難しいことだと言っています。ことばの点で過ちがなくなれば、ヤコブが手紙の冒頭でいった、十分に成熟した人、すなわち「完全な人」になれると言っています。

#### 2C 全体を制御する小さい物 3-4

<sup>3</sup> 馬を御するためには、その口にくつわをはめれば、馬のからだ全体を思いどおりに動かすことができます。<sup>4</sup> また船を見なさい。あのように大きくて、強風を受けていても、ごく小さい舵によって、舵を取る人の思いどおりのところへ導かれます。

小さい器官でも、からだ全体を制御していることを示す喩えとして、二つのことを挙げています。一つは、馬の口のくつわです。もう一つは、船の舵です。当時は、船底にある、尾ひれのような舵のことを話していると思いますが、今は、船長が手に持つ、大きなハンドルでしょうね。一度、横須賀に寄港している、空母ロナルド・レーガンの船内を案内する動画を見たことがあります。あの巨大な空母の操舵室にある艦長の席には、本当に何もなくなるとパソコンのマウス一個でした！<sup>1</sup>

ですから、いかに口を制御するかが、大きな課題なのです。箴言 13 章 3 節に、「自分の口を見張る者はたましいを守る。唇を大きく開く者には滅びが来る。」とあります。5 節に出てきますが、口はどうしても大きく開いてしまう、自慢してしまうのです。けれども、それをしっかりと見張っていることで、自分のたましいを守るのです。

御霊の実の特徴に「自制」があります。ことばにおいて自制を働かせるなら、そのことばは、人を建て上げることができます。支え、励まし、正しい道に導くこともできます。私たちが生きているのは、神のことばによるのであり、ことばがいかに力を持っているかがわかります。御霊によって、人々に、恵みを与えることができるのです。

---

<sup>1</sup> <https://youtu.be/b6NpNRz5b8Y?t=631>

## 2B 舌にある不義 5-8

しかし、制御しなかったらどうなのか？また、制御がなかなかできない現実を、次に話します。

### 1C ゲヘナにまで至る火 5-6

<sup>5</sup> 同じように、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って自慢します。見なさい。あのよう小さな火が、あのよう大きな森を燃やします。

制御できていない、不義のために使われる舌は、ちょうど山火事の始まりとなる小さな火のように、とてつもない災いを与えるということです。噂や悪口について、ユダヤ教の中でこんな話があります。ある女性が、ユダヤ教のラビについて悪い噂を立てました。またたく間にその話は伝わり、彼女はそれを後悔して、ラビのところに行き、謝りました。ラビは、「家からあなたの、羽毛の枕を持ってきてください。」とお願いします。持ってきたら、建物の屋上で、その枕に切り裂いてくださいとお願いします。羽毛は、風によって至るところに飛んでいきました。そして、こう言います。「どうか、その羽毛を探して、また枕の中に入れてください。」もちろん、あらゆるところに散らばって、どこに行ったか分かりませんから、回収できません。噂話もそうですよ、ということです。

<sup>6</sup> 舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあってからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。

舌によって、その人の人生全体を汚し、そして死後、ゲヘナに投げ込まれる罪を犯すのだ、という警告です。ゲヘナとは、最終的に、不義を行う者が閉じ込められる、苦しみ場所です。悪魔と悪霊どものために設けられたところですが、その道を自ら選ぶ者たちも、そこに投げ込まれます。

自分が舌で語っていることに、このような健全な恐れを抱いていることは大事です。自分のからだの一部でしていることは、大したことがないと、私たちはどうしても軽視してしまいます。イエス様は、口ではないですが、目で見てることについてゲヘナを恐れることについて、こう言われました。「マタ 5:29 もし右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。」

### 2C 制しがたい舌 7-8

<sup>7</sup> どのような種類の獣も鳥も、這うものも海の生き物も、人類によって制することができ、すでに制せられています。<sup>8</sup> しかし、舌を制することができる人は、だれもいません。舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。

ヤコブは今、創世記の初めにある人に与えられた神の使命について話しています。「彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。

(1:26)「私たちが身近でその姿を見ることができるのは動物園や、サーカスです。獰猛な動物、巨大な動物であっても、物の見事に調教しています。これだけ人間には、被造物を支配する力が与えられています。しかし、なんと自分の顔のちょこっついている口、その中の舌は制御することができません。

そして、舌を制することができない時には、舌は絶え間なく悪であり、死の毒に満ちている、とのこと。三浦綾子さんの書かれた本「光あるうちに」には、次の逸話が書かれています。「泥棒と悪口を言うのと、どちらが悪い」私の教会の牧師は、「悪口の方が罪深い」と言われました。大事にしていたものや、高価なものを盗られても、生活を根底から覆されるような被害でない限り、いつかは忘れます。少しは傷つくかも知れませんが、泥棒に入られたために自殺した話はあまり聞かない。だけど、人に悪口を言われて死んだ人や少年少女の話は時折聞きます。」

詩篇の中でダビデは、言葉にある悪の力をたくさん言及しています。彼が必死に祈ったのは、その多くはそしりからの救いでした。「42:10 私に敵対する者たちは私の骨を砕くほどに私をそしり絶えず私に言っています。「おまえの神はどこにいるのか」と。」ことばは、神に似た者として与えられた、他の動物にはない特権です。神は、ことばをもって天地を造り、ことばをもつていのちを与えています。それだけ力があります。それを邪悪な心によって使われると、どれだけの破壊力になるか、人は知らないのです。

そして箴言でも、噂話やそしりについて、数多く語っています。興味深いのは、口に出さなくとも、憎しみを心に抱いている場合もあります。「10:18 憎しみを隠す者は偽りの唇を持ち、そしりを口に出す者は愚かな者である。」同じ言葉であっても、心に抱いていることが憎しみなら、それが人に伝わり、心を突き刺すのです。ことばを発する時、心に抱いているものが出てくるからです。「マタ 15:18 しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。」

## 2A 心を欺く人 9-18

そして、ヤコブは、このことが賛美をしているような信者の中でも起こっていることを話しています。その矛盾について語っています。

### 1B 兄弟を呪う者 9-12

#### 1C 賛美し、呪う口 9-10

<sup>9</sup> 私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。<sup>10</sup> 同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。私の兄弟たち、そのようなことが、あってはなりません。

信じているのに、なぜ、こんなことを？という疑問を、みなさんも持ったことがあるかと思います。

ヤコブが取り組んでいるのは、まさにこのことです。言っているだけでは信仰ではない、行いが伴ってこそその信仰なのだということです。

神を賛美しているのに、口の制御ができておらず、人間を呪っているということをしている人々があります。兄弟を裁いたり、悪口を言ったりしています。礼拝賛美を教会で献げて、家に帰ると悪口を言っている。いや、家に帰る前にすでに、他の兄弟また姉妹をこき下ろす話を違う場所で行っている。こんな姿は、あってならないのです。

ここで大事なのは、「**神の似姿に造られた人間**」という言葉です。人間には、神の残像があります。確かに、人は罪を犯して、神のかたちから落ちてしまっているのですが、しかし、神のかたちとしての価値と尊厳が残されているのです。ですから、他の人について、悪口を言っているということは、神ご自身に対する毀損行為を取っているということです。

ヨハネも第一の手紙で似たことを話しています。「4:20 **神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。**」自分が神から生まれたというなら、その兄弟も神から生まれています。ところが憎んでいるということは、実は神を愛していると言っていることも偽りなのです。

#### 2C 心から湧き出るもの 11-12

<sup>11</sup> 泉が、甘い水と苦い水を同じ穴から湧き出させるでしょうか。<sup>12</sup> 私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりすることができるでしょうか。塩水も甘い水を出すことはできません。

悪口や見下すことば、また噂をするということは、その人が、どんなに正論のようなことを語っていても、心そのものが汚れていると言わざるをえません。ですから、心を見張り、そして自分の発する言葉を見張るのです。「箴 4:23 **何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。**」ここでヤコブは、心のことを泉にととえています。神をほめたたえることが甘い水、兄弟を呪うことが苦い水ですが、同じところから出ているはずがないのです。その神への賛美が偽りであり、口先だけのことなのです。

そして、実を結ばせることに喩えています。主をほめたたえることは、賛美の実であり、心が純真だからできることなのですが、兄弟を呪うことは、汚れた心の実であります。どちらかではないのです。心の一新によって御霊に変えていただき、それで初めて神を賛美できます。心が塩水のようになっていたら、甘い水は出てきません。賛美や祈りなど、表面的に信仰的なことを口から出しても、それが偽りであることは兄弟についての悪口で明らかにされるのです。



## 2B 知恵ある者 13-18

### 1C 柔和な行い 13

<sup>13</sup> あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。

午前礼拝で、この箇所をじっくりと学びました。私たちは、キリスト者特有の偽りに惑わされやすいです。それは、言葉がなめらかで、いかにもクリスチャン的なことを語っているからです。そのような人たちは、知恵ある人に見えます。いろいろなことを論じることができるので分別ある人に見えます。けれども、そこにまことの知恵があるわけではありません。

まことの知恵は柔和な行いに現れます。柔和さに裏打ちされた、立派な生き方に示されています。1章で学びましたように、知恵というのは、具体的な行いの中で、神の知識が生かされるようにします。ことばは達人であっても、柔和な行い、立派な生き方がなければ、無益です。そして、その知恵は、心の一新によってようやく得られるものです。ヤコブもすでに教えていました。「1:21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」

柔和については、午前礼拝でじっくり学びました。ダビデの生涯が模範になります。自分の理解が絶対だと信じていません。サウルが、自分を殺そうとしていても、それでもサウルが主の油注がれた王であるとしませんでした。そして、自分の手で仕返しをしません。自分ではなく、主ご自身が自分を王にすることを知っていたので、主の時を待ちました。そうして、ようやく、主に約束された者を受け継ぐことができます。イエス様が、柔和な者が地を受け継ぐと言われたとおりです。

### 2C 地上の知恵 14-16

<sup>14</sup> しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのはやめなさい。

ここで、自分が知恵を持っているとして自慢しているけれども、そういう人たちが見落としているのは、自分自身の心なのです。どんなにすぐれた知識を持っていても、愛がなければ無に等しいと、パウロは言っていましたね。心が主にあって清いかどうか、どんなことを語るにしても重要になります。心にある問題を置き去りにして、知恵のあることを語っても、真理に逆らっているにしか過ぎません。

そこで、ヤコブがここで取り上げているのは、初めに「苦々しいねたみ」です。苦々しさは、だれかに不正を働かれたことによって抱くものですが、だから義憤で語っているのだと偽ることができるのです。苦みについては、ヘブル書 12章で学びました。「12:15 だれも神の恵みから落ちないよ

うに、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」苦い根が生え出るのは、神の恵みから落ちるからです。イエスご自身が、たくさんご自身にふりかかった苦しみを苦々しく思うことはできましたが、それを父のみこころだと知って、従われました。そこにある自由を受け取った者は、苦みの中に留まっていることはできません。

そして、「ねたみ」がありますね。主によって祝福されていることを、そのまま喜ぶのではなく、引き落としたいと願って、それで知恵と称して、悪口を言ったりするということです。

それから、「利己的な思い」です。自分の利益を求めることです。ユーチューバーで、迷惑系に入れられている人々は、ただ再生回数を増やして、チャンネル登録をしてもらい、願わくは収益を得たいという動機ですね。イエス様に引き寄せたいのではなく、自分たちに引き寄せたいのです。

<sup>15</sup> そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。

ここが大事です。知恵が上、つまり天におられる神から来ているのか、そうでないのか？は、重要です。地上のものからは、どんなに知恵深くあっても、必ず悪い実を結びます。天からであれば、17節以降に見ますが、平和に満ちます。私たちが御霊の注ぎが、礼拝や集会に与えられて、どれほど平安に良くなることができるか、体験した者にはよくわかりますね。

同じようなことを語っていても、地上からのものは、どんなことがあっても、必ず悪い実を結びます。地からは、茨とあざみが生えると主が言われました。どんなに知恵深いことのように見えても、良い実が結ばれていないのです。

次に、「肉적」であると言っています。これは肉体の感覚を刺激するようなものです。ユダが、手紙の中で、そのような者たちについてこう言っています。「ユダ 10 しかし、この人たちは自分が知りもしないことを悪く言い、わきまえのない動物のように、本能で知るような事柄によって滅びるのです。」自分の知りもしないことで悪く言っています。本能的に動いています。

そして、「悪魔的」だということです。悪魔が主に行うことは、人々を高ぶらせることです。自分が高ぶって、神のようになろうとして、それで墮落しました。神の前では、私たちはへりくだることしかできません。けれども、いつの間にかだんだんと高ぶって、それで非常に横柄なことを語り始めます。自分が知っている、自分が力を持っていると自慢して、自分に異論をいうものなら、徹底的に押し潰します。

<sup>16</sup> ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。



ここが、実を見れば分かるという点です。知恵と呼ばれているものであっても、秩序の乱れが起こっていれば、そこには妬みや利己的な思いがあることを示しています。そして、あらゆる邪悪な行いがあれば、妬みや利己的な思いがあることが分かります。

私たちは、世の中では、これらのことをよく見るでしょう。いかにも知識ある人であるのに、このような秩序の乱れや、邪悪な行いが行われています。SNS などには、そのような罵詈雑言が並んでいます。しかし、それは世の中ですから、当たり前と言え、その通りです。ところが、キリストの名をつけている人々、キリスト者が、これらのことを行っているのを見ている時に、驚くのです。こうしたことから、一番、離れていなければいけないのに、世と変わらないことをしているのです。いわゆる、偶像礼拝とか、淫行とか、そういうものは、強く反応しても、こうしたことばの罪については放置されていくということが起こります。ですから、ヤコブがここで強く戒めているのです。

### 3C 上からの知恵 17-18

<sup>17</sup> しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。

知恵を対比させています。上からの知恵、神からの知恵です。第一に清いものですよと言っています。午前礼拝でもお話ししましたが、心の清い人は、神を見るとイエス様が約束されました。つまり、礼拝を献げている人が、まず知恵が与えられているのです。そして、そこには平和があります。そして、自分は何でもない者、ただキリストのすばらしさがあるので、人には優しくします。そして、平和が満ちているので、相手を尊重し、協調性があります。

そして、憐れみを神から与えられているので、憐れみと良い実に満ちるのです。教会は、問題探しするところではありません。問題を抱えた人が、主にある憐れみを受けるところです。過ちから立ち直るように、助けるところです。神の憐れみに触れて、悔い改めるところです。そのための知恵が、上からの知恵です。

そして偏見がありません。これは 2 章で見えてきたことです。目に見えるところで判断して、悪い心で裁いているものがないのです。そして、偽善もありません。取り繕って、霊的に見せていないのです。そのままの自分で、しかしキリストの恵みと憐れみに触れている、そのままの自分で人々に接するのです。

<sup>18</sup> 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに蒔かれるのです。

「義」という言葉をヤコブが出してきました。その義がどこにあるのか？それは、神にしかないのです。義を語っている時に、神にしかない義なのに、いつのまにか自分たちにあるとしていく中で、

混乱と争い、妬みや、邪悪な思いが出てきます。

平和のうちに蒔かれるとあります。礼拝によって神からの平和が与えられます。そして、それを具来的に私たちは互いに、平和を造ることによって、神の平和を体験していきます。そして、その平和の中で、初めて正しさが神だけにあることを、証しすることができるのです。

最後に、牧者チャック・スミスのお言葉を紹介します。よく次のことを話していました。「何か教理的に強い確信を持っていたら、それが教会全体にとって知るべき、理解すべき真理だと感じているなら、初めにその真理がいかに自分の生活を変え、イエス様に似たものになっていったかを見る機会を与えてください。」イエスの似姿に変えられていくという実こそが、まことの知恵です。